

特別研修

月例研究会 議事録 (11 月)

2007 年度第 6 回

報告題名 子供の異年齢遊びの視点による地域環境教育の研究	
報告者 池田敦 (所属分野) 環境経済学	日時 11月22日 午後3時~午後5時 場所 第8講義室
座長 飯塚	議事録担当者 小山田
出席者 長谷部、木谷、冬木、川島、安部(雅)、澁谷、鹿嶋、小山田、阿部(秀)、池田、鈴木、西橋、飯塚、デッフィ、徐、伍、斯欽	
報告要旨 <p>近年、地球温暖化など環境問題の対策は、世界的な課題となっている。そのような環境問題の対策の一つとして、環境教育が注目されている。環境教育は1997年の環境と社会に関する国際会議において、持続可能な開発のための教育として位置づけられた。本研究では、環境教育の持続的な地域社会づくりを強く意識している。そして、子どもの地域づくりへの参画という視点から、子どもが地域の環境や様々な問題を主体的に学ぶことを重要視し、その一つの在り方として、子どもの遊びに注目した。その中でも、子どもの集団遊びにおける異年齢間の遊びの必要性を中心に考え、それを大人たちに了解させることで、子どもの遊びにおける地域社会教育の新しい観点を提案することを目的としている。</p> <p>本報告では、子どもの遊びを、①教育的⇔放任的、②異年齢同士⇔同年齢同士、③一人遊び⇔集団遊び、④人工の遊具での遊び⇔遊び目的で無いもの、⑤安全⇔危険、⑥生態系と触れ合える⇔生態系と触れ合えない、という六つの視点から、今の子どもの遊びのもつ問題に対し、どのように対処していくべきかを議論できるようなゲーミングを設計し、行なった実験の内容から、今後の研究の方向性を示す。</p>	

質疑・応答

西橋：今は異年齢間での遊びが必要だ、というのがこの研究の主旨だと思うのですが、ということは、昔は異年齢遊びが今よりも多かった、ということなのでしょう。

池田：そのとおりです。

西橋：では、現在異年齢遊びがなくなってきた背景や理由とはどのようなものなのでしょうか。

池田：それは、異年齢遊びに対する親の理解がなくなったことや、社会状況が変化したことなどが考えられます。特に、親は、異年齢遊びでは年上から年下に対するいじめがあるのではないかと、この危惧もっています。

西橋：異年齢遊びが行われないように親がしむけている、ということですね。それでは、その親に対し、異年齢遊びが必要だと示すということが、問題解決の方策として考えられないのでしょうか。たとえば、地域で祭りをして、それを中学生、小学生といった異年齢同士の子どもにしきらせるというような。

池田：それは、一つの手段としては考えられます。しかし、子ども立場から考えると、異年齢同士よりも同年齢同士の方が面白いと思われるので、なかなか難しいと思います。

西橋：それでは、子どもを放任しておけば、異年齢遊びは発生するというのでしょうか。

池田：いえ、今回扱っている問題点は、親が子どもを押さえつけているということです。押さえつけをやめて、放任したときに、異年齢遊びが発生するかどうか、ということは今回は扱っていません。

西橋：親が積極的に、異年齢で遊ぶようにしむけるのがいいのではないかと、思ったのですが、それでは放任的ではなくなりますし…。

澁谷：まず、素朴な疑問ですが、なぜこの研究を農学部でするのでしょうか。

それから、現在異年齢遊びがないということですが、そのデータはあるのでしょうか。

池田：ある小学校の4年生に行ったアンケートでは、異年齢遊びをする子どもは28人中1人しかいませんでした。また、私自身の子ども時代の経験から考えても、異年齢遊びはなかったと思います。それから、私が読んだ文献でも、現在異年齢遊びが行われていない、ということはよく指摘されています。また、なぜ農学部でこのような研究を行うかという、これは背景に書いてあります。つまり、持続可能な開発のために、環境教育というものは位置づけられるのですが、そこで一番重要なものとして、私は子どもの遊びを重視しているのです。グローバルな環境問題について知識があることよりも、地域環境を見つめなおすということが重要ではないか、という視点から、環境教育に、とりわけ子どもの遊びに注目しています。

澁谷：池田さんのいう「環境」の意味は、環境経済学などの「環境」の意味と違うのではないのでしょうか。環境経済学などの「環境」はエコロジーですが、池田さんのいう「環境」は人間関係のことではないかと思います。

それから、データのことで、池田さんが読まれたという文献には必ず出典があるはずなので、データは手に入ると思います。

冬木：まず、子どもの定義をすることが必要です。つまり、何歳から何歳までを子どもとするか、ということ。

それから、澁谷さんのおっしゃるとおり、現在異年齢遊びがないとはいきれないと思います。それに、同年齢の遊びが増えるという現象は、私の解釈では、子どもの年代が上がるとクラスの中の人間関係が濃くなるので、異年齢での遊びが減り、同年齢での遊びが増える、ということだと思います。人間関係

が濃くなるということは、子どもが社会的に発達しているということなので、それは同年齢遊びのプラスの面であると思います。

また、異年齢ではいじめが起きるとおっしゃいましたが、統計をとれば、おそらくいじめのほとんどは同年齢だと思われます。

池田：まず、本研究での子どもの定義ですが、子どもは小学校低学年から中学年に設定しています。それからいじめのデータということですが、私もおそらく同年齢でのいじめのほうが異年齢よりも多いと思います。あとでちゃんと調べたいと思います。